

日本銀行旧小樽支店 金融資料館

- 物件名：日本銀行旧小樽支店 金融資料館
- 住所：色内1-11-16
- 電話：21-1111
- 所有者：日本銀行
- 運営：杉本芳浩（日本銀行札幌支店長）
- 人員：5～7人
- 建物履歴
 - 明治45年 日本銀行小樽支店として創建
 - 平成14年 日本銀行札幌支店に統合により閉鎖
 - 平成15年 日本銀行旧小樽支店 金融資料館開館
- ※日本銀行小樽支店
 - 明治26年 日本銀行は小樽派出所を設置
 - 明治30年 日本銀行小樽派出所は小樽出張所に昇格
 - 明治39年 日本銀行小樽出張所は日本銀行小樽支店に昇格
 - 明治43年 日本銀行は色内町に小樽支店新築に着工
 - 明治45年 日本銀行小樽支店竣工



外観

■外観

- ①様式／ルネサンス様式を取り入れ、屋根には5つのドームを配し、外壁はレンガの表面にモルタルを塗り石造り風に仕上げ。
- ②構造／建物の構造は、レンガ造りの建築技術に、鉄骨やコンクリートなど次代の主役となる技術を取り入れる。
- ③建物内外壁の塑像～フクロウ～／アイヌの守神シマフクロウをモチーフにしたとされ、内壁に12体、外壁に18体。職員がいない夜、フクロウが支店を見張るといわれた。

■平成24年補修工事

耐震性を含む安全性の向上と、特段の理由がない限り外観の変更が伴わない改修仕様・工法を採用。

- ①耐震補強／煉瓦壁に屋上から垂直に穴を開け鋼棒を挿入、下部を固定し上部から引っ張って張りを持たせ、水平耐力を向上。
- ②装飾補修／外壁の装飾名ホィッスル上部のモルタル剥落、およびデンティルの補修。

■内観

- ①営業場カウンター／旧小樽支店の窓口として使われたカウンターをはじめロビーの周辺には、岐阜県赤坂産大理石を使用。
- ②営業場の天井／営業場の床から天井までの高さは約10.5m。屋根はレンガの壁から鉄骨を組んで支える構造となっており、柱のない大きな吹き抜けの空間。
- ③漆喰壁／内壁は4層の漆喰を塗り、厳かな雰囲気。
- ④金庫室／約25cmもある鋼鉄の金庫室扉の横には、人孔と呼ばれるサブ扉があり、普段は換気設備としているが、万が一主扉が開かない場合に使用。
- ⑤1千億円／たとえば1万円札で1千億円の紙幣が金庫室にあったとしたら。
- ⑥支店長室／日銀のマーク（漢字の「日」の古代書体）が彫られた台輪。
- ⑦階段手摺り／ここにも日銀マークが彫刻。
- ⑧カウンター大理石に化石？／大理石に化石のようなものが・・・

■内容

（明治26年派出所を何故小樽に？）

日本銀行は、道路工事や炭鉱開発など開拓事業に伴う国庫金を取扱い、北海道の金融を円滑にするため、北海道に店舗を設置することとした。小樽は、天然の良港に、開拓使の置かれた札幌の外港としての地の利も加わり急速に発展。その後の鉄道整備と幌内炭鉱からの石炭輸送などから、小樽港とともに小樽の商業都市としての重要性がますます高まったため、明治26年に小樽に派出所を設置した。

（平成15年金融資料館をなぜ設置？）

小樽の繁栄と北海道の経済発展を共に生きてきた日本銀行小樽支店は、その記憶を継承する建物の有効活用と、地元の方々からの建物を残してほしいとの強い要望から、日本銀行の歴史や業務などを分かり易く解説する広報施設として、平成15年に金融資料館として再スタートした。また展示内容には、銀行券に施されているマイクロ文字などの偽造防止技術や、1億円の重さ体験のように、来館者に「驚きと体験」をしてもらい、日本銀行を身近に感じていただきたいといった様々な工夫も。

■客層

札幌市・小樽市からの来館者が2割程度、その他は主に他県からの旅行客で、年代はかなり分散、男女別では約半々。最近、外国の方も多く来館されるようになったため、把握するためアンケート項目に追加。

平成25年来館者累計100万人を達成。その後の来館者数も、年間約10万人のペースを維持。

日本銀行旧小樽支店 金融資料館



約25cmもある鋼鉄の金庫室



内壁にもフクロウが



日銀マークの支店長室台輪



内壁はレンガの表面に漆喰を4層塗り



天井装飾



回廊軒下装飾



風除室



岐阜県赤坂産大理石のカウンター



外壁の塑像～フクロウ～



ホイッスル上部のモルタル剥落、およびデンティルの補修